

委員長 細江英公(ほそえ えいこう)

山口県周南市が実施されている林忠彦賞は、日本の多くの写真賞の中でもレベルが高いと思います。応募される作品には自由な雰囲気があり、私たち選考委員はその皆さんの気持ちを盛り立てる、おしりを下から持ち上げて素晴らしい写真家がたくさん出てくるように努めるのが役割だと思い、選考を進めています。

林忠彦先生がお亡くなりになっても、山口県の写真にはやはり林スピリットというものが息づいていると思います。そういうところにまた、どんどん後輩が生まれてくるという土壌があると思います。その意味で、山口県の写真というのは、林イズムというか、林先生の大きな影響を今も伝えつつ広がっている、そういう特徴があると思います。

写真というものを自分の生活の中に取り込む、あるいは芸術とする、そういう精神は日本の中ではやはり南というか西ではないかな、と私は思うことがあります。そのほかの地に無いわけではありません。例えば山形県の土門拳とか優れた写真家もたくさんおられますから。そういう先輩たちがいらっしゃいますから、それなりに写真は盛んなんですけど、北へ行くと、秋も終わり頃になると寒くてカメラを持つ手が凍えてしまいます。ましてや冬になれば写真なんか撮れません。写真を撮る余裕なんてなくなります。やはり一年中写真が撮れる南の方は恵まれたところだと思います。

山口県は歴史的にも、幕末に色々な意味での文化が生まれ、それが京都へ、江戸へというように素晴らしい遺産を持っています。写真は新しいものではあるけれど、そういう遺産のあるところに生まれやすく、やはり京都のような文化的背景が強かったり、幕末からの力がグッと盛り上がったところ、そういうところに普及しています。そういった意味で、山口県は写真の人材がすごくたくさんいると思います。林忠彦賞はそうした土壌があって発展してきたと思うのです。

受賞作の有元伸也さん『TOKYO CIRCULATION』。これはなかなか重厚感のある作品です。今や時代は軽佻浮薄なものが重んじられているようですが、決してそうではありません。やはり重みのある、じっくりとした作品というのは時代を超越して長く残ります。一時もてはやされるような写真というのは、時代が少し変われば何にも無くなるものもあります。写真というものの持つ重み、歴史、そういうものを十分背景に持ちながら今日に花を咲かせるような、そういう作品が普遍的なものだと思います。それはこういう作品を見ればわかります。

この写真は都会的、日本的というよりも西洋的、アメリカ的、そういう意味では非常に国際性のある作品だと思います。今や自分の生まれた土地だけが被写体ではなく世界中が対象です。東京でも大阪でも、そこに自分の被写体が転がっていると思えば良いわけで、自由にやってほしいと思います。自分の周辺を見渡しながら、日常の中から誰でも出来ないようなものを見つけられると思うのです。そのベースにあるものは何かといえば、珍しい風景とか、珍しい時とか物、そういうものではなく普遍的な、人間的なものです。たまたまそれが山口にしかない、あるいは鹿児島にしかないというようなことがあるかもしれませんが、やはり人を感動させる優れた写真の大もとは人間性なのです。そういうものを背景に、普遍的なものを自分のテーマにしながら、そう考えて撮ってください。